

宝江小学校校内研究概要

1 研究主題

主体的に問題解決の活動に取り組み、共に追究する児童の育成

ー生活科や理科の見方・考え方を働かせた学習活動の実践を通してー

2 主題設定の理由

(1) 今日の教育課題から

21世紀は「知識基盤社会」の時代と言われ、様々な分野で技術革新が繰り返され、情報の更新が絶え間なく進んでいる。人工知能や仮想現実の技術も飛躍的に進化し、今後10～20年程度で半数の仕事が自動化されたり、現在の小・中学生の65%が今存在していない職業に就いたりすると言われている。私たちの生活はより快適になっていく一方で、急速な変化により、ますます予測がしにくい社会となっていく。このような社会の中で育っている子どもたちは、自然の事物・現象に直接触れる機会が減少しており、それに伴い、子どもが自らの体験に基づいて物事を判断する機会も減少してきている。

新学習指導要領が、平成30年度からの移行期間を経て、令和2年度から全面実施となる。小学校理科の目標には、「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成すること」が掲げられている。この目標を達成していくためには、自然の事物・現象と主体的に深く関わり児童自らが問題を見いだしていくこと、問題解決の見通しをもちながら、他者と協働して解決していくこと、児童が自らの学びを振り返って学んだことに価値付けしていくことが求められる。

(2) 学校教育目標の具現化から

本校では、「夢と志をもち 自らをきりひらく たくましい子ども」を教育目標とし、「自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動できる子ども」「めあてをもって挑戦し、自分らしさを伸ばす子ども」「互いの良さを認め合い、共に生きていく子ども」のそれぞれを目指す児童像として掲げ、教育活動全体を通してその具現化に努めている。特に、重点施策の一つである「学力向上」の具現化にあたっては、基礎的・基本的な内容を確実に定着させるとともに、自ら学ぶ意欲の向上や主体的な学習態度の育成を目指した学習指導を推進していく必要がある。

(3) 児童の実態

児童の生活科の様子を見ていると、見る、作る、育てるといった体験活動に積極的に取り組むが、気付いたことを伝えたり表現したりすることは苦手な児童が多い。また、理科の授業では、実験・観察に意欲をもって取り組んでいる児童は多いが、観察・実験の結果からどのようなことが分かったか考えたり、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりすることが苦手な児童が見られる。

体全体で身近な環境に直接働きかけることができる生活科や、児童の自然事象に対する見方や考え方を大切にしながら学習に取り組むことができる理科は児童にとって意欲的に取り組むことができ、児童の科学的な思考力や表現力を育むことができる教科である。

このような実態や教科の特性をふまえ、生活科・理科を中心に、児童が主体的に問題意識をも

って問題の解決に取り組み、他と関わり合いながら向上していくことができる学習活動を工夫していく必要があると考え、本研究主題を設定した。

3 研究主題のとらえ方

(1) 「主体的に問題解決に取り組む」とは

児童自らが、自然の事物・現象から問題を見出し、見通しをもって問題を追究したり、観察・実験の計画や方法を考えたりしていくことととらえる。

(2) 「共に追究する児童」とは

「共に」とは児童が、他者と協働しながら、「対話」を通して学習することである。
「追究する」とは、児童が主体的に問題解決を行う中で、見通しをもち、検証方法を考えたり、観察・実験の結果と事前にもった見通しとの一致や不一致を明確にしたりしていくことである。
つまり、「共に追究する」とは問題解決の過程の中で、自分とは異なる意見を受け入れ、多面的・多角的に考えながらよりよい考えを作り出すことととらえる。

(3) 「生活科・理科の見方・考え方」とは

生活科

身近な生活に関わる見方・考え方であり、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりでとらえ、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする事ととらえる。

理科

身近な自然の事象・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点ととらえる。

領域	エネルギー	粒子	生命	地球
理科の見方・考え方	主として量的・関係的な視点で捉える	主として質的・実体的な視点で捉える	主として多様性と共通性の視点で捉える	主として時間的・空間的な視点で捉える

4 研究目標

主体的に問題解決の活動に取り組み、共に追究することができる児童を、生活科や理科の見方・考え方を働かせた学習活動を重視した授業実践を通して育成する。

5 目指す児童像

生活科や理科の見方・考え方を働かせながら、自ら考え、他と関わり合う児童

各 学 年 部 の 目 指 す 児 童 像		
低学年部	中学年部	高学年部
活動や体験を通して気付いたことなどを表現して考えることができる児童	生活経験を基に予想・仮説を立て、考えを伝え合う中で科学的な見方に気付く児童	根拠のある予想・仮説を立てることができ、友達との関わりの中で自分の考えを見直すことができる児童

6 研究の視点

視点1 生活科や理科の見方・考え方を働かせながら自分の考えをもたせる学習活動の工夫

- 体験や観察・実験結果の整理
- 学習の振り返り
- ICTの活用

視点2 生活科や理科の見方・考え方を働かせながら相互に比較と理解をし、考えを広げさせる学習活動の工夫

- ペア、小集団学習の実施
- 視点と論点の明確化

7 研究の内容と方法

(1) 内容

- ①研究の視点に基づいた授業研究
- ②児童の興味・関心を高める教材開発の工夫
ア教材開発
イ環境の整備

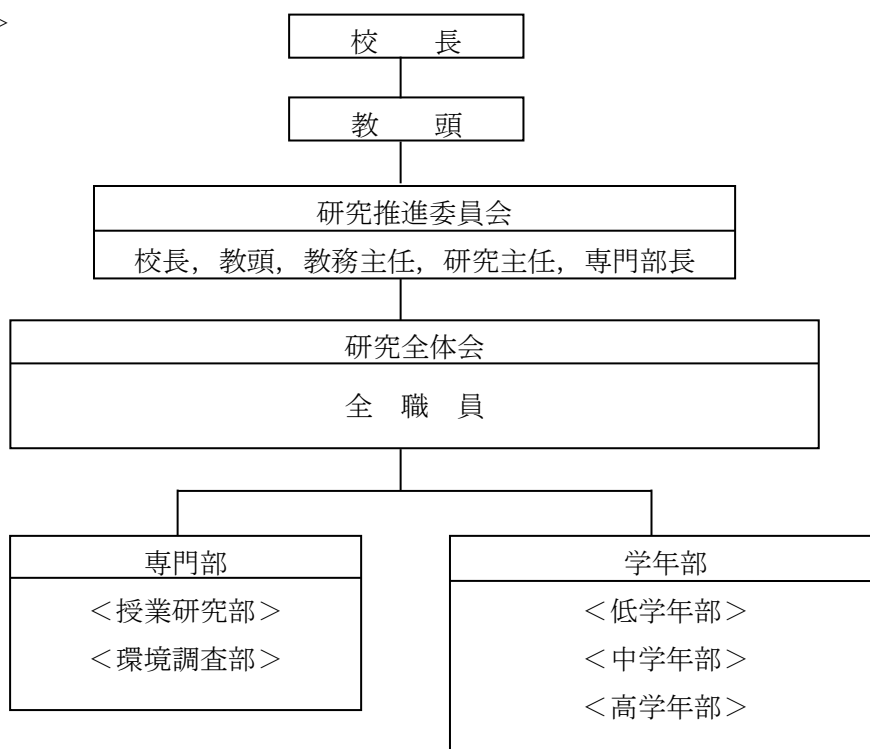
(2) 方法

- ①研究実践授業のもち方
 - ・各学年1回行う（全6回）。
 - ・研究実践授業の事前検討会全体会は、学年部で1回行う（全3回）。単元開始前に実施し、単元構想も含めて検討する。
 - ・研究実践授業の事後検討会全体会は、全ての研究実践授業後に行う（全6回）。ワークショップ型とし視点に沿って話し合いを進める。話し合いの運営は授業研究部員が行う。
- ②研究に関する研修の推進
 - ・生活科・理科の研究に取り組んでいる先進校の視察や、講師を招聘しての研修会を行い、理論や指導法についての研修を深める。

8 研究の組織 ※◎はチーフ，〔学〕は学力向上担当，（ ）は担当学級，（養）は養護教諭

部会名	構成員	内 容
研究推進委員会	校長 教頭 鈴木 有〔教務主任〕 ◎須藤 士 西條 純〔学〕 佐々木紀子〔学〕	・研究推進のための企画，立案，調整 ・研究全体会の企画運営 ・各学年部や専門部間の連絡調整 ・マンパワー事業を活用した研修会の企画，立案，調整
研究全体会	全職員	・研究推進に係る協議 ・研究推進を図るための理論の研究・研修 ・授業実践の検討会
授業研究部	◎佐々木紀子（な） 遠藤 寛樹（4） 伊東めぐみ（1） 政木 美恵子（青） 鈴木 有（教） 齋藤 ゆき（5）	・指導案，指導過程等の基本型の提案 ・授業研究会の設定と運営 ・先進校の実践や各種文献から指導法の研修
環境調査部	◎西條 純（3） 千葉 弓愛（2） 小山 慎子（ひ） 島原 栄子（養）	・日常の取組についての提案 ・家庭への働き掛けについての検討 ・意識調査・実態調査の実施と考察
学年部	<低学年部> ◎伊東めぐみ（1） 千葉 弓愛（2） 政木 美恵子（青） <中学年部> ◎遠藤 寛樹（4） 西條 純（3） 小山 慎子（ひ） 鈴木 有（教） <高学年部> ◎齋藤 ゆき（5） 須藤 士（6） 佐々木紀子（な） 島原 栄子（養）	・学年部の目指す児童像の設定 ・教材研究，教材づくり，授業研究の推進 ・学習指導案の検討・作成，指導資料の作成や考察

<組織図>



9 研究計画

月	推進内容
4月中旬	・研究組織の編成 ・研究の内容と概要の確認 ・研究授業計画の立案
5月初旬	・第1回児童意識調査の実施, 分析
6月 3日 (月)	・第1回研究実践授業 (6年須藤 士)
6月10日 (月)	・指導主事学校訪問 ⇒①6年須藤 士 理科 ②4年遠藤 寛樹 体育 ※臨時2部会で授業づくりを進める。
7月 4日 (木)	・第2回研究実践授業 (5年齋藤ゆき)
9月 5日 (木)	・第3回研究実践授業 (4年遠藤寛樹)
10月31日 (木)	・第4回研究実践授業 (2年千葉弓愛)
11月20日 (水)	・第5回研究実践授業 (1年伊東めぐみ)
12月 5日 (木)	・第6回研究実践授業 (3年西條純)
1月	・第2回児童意識調査の実施, 分析, 考察
2月	・研究の振り返り
3月	・校内研究のまとめの発行と次年度計画の立案

10 研究計画

- (1) 研究実践授業を各学年1回行う。
 - ・事前の指導案検討, 研究授業, 事後の授業検討会
- (2) 児童対象のアンケート調査を実施し, 集計, 分析を行って指導に生かす。(5月と1月)
 - ・生活科と理科に関する意識・実態調査
- (3) 職員を対象として, 研究の取組に関するアンケート調査を実施し, 視点や手立てが妥当であったかどうかの検証を行う。(12月)

11 構想図

学校教育目標

夢と志をもち 自らをきりひらく たくましい子ども

互いの良さを認め合い、
共に生きていく子ども

自ら学び考え、自ら判断
して行動できる子ども

めあてをもって挑戦し、
自分らしさを伸ばす子ども

目指す児童像

理科の見方・考え方を働かせながら、自ら考え、他と関わり合う児童

研究主題

主体的に問題解決の活動に取り組み、共に追究する児童の育成

— 理科の見方・考え方を働かせた学習活動の実践を通して —

研究目標

主体的に問題解決の活動に取り組み、共に追究することができる児童を、生活科や理科の見方・考え方を働かせた学習活動を重視した授業実践を通して育成する。

視点(1)

生活科や理科の見方・考え方を働かせながら自分の考えをもたせる
学習活動の工夫

- 体験や観察・実験結果の整理
- 学習の振り返り
- ICTの活用

視点(2)

生活科や理科の見方・考え方を働かせながら相互に比較と理解をし、考えを広げさせる学習活動の工夫

- ペア、小集団学習の実施
- 論点の明確化

グローバル社会・
知識基盤社会

【児童の実態から】

- ・見る、作る、育てるといった体験活動に積極的に取り組む
- ・実験・観察に意欲をもって取り組んでいる児童が多い
- ・自分の考えを周りの人に説明したり発表したりすることが苦手

家庭学習の習慣化 家庭との連携

新学習指導要領改定